［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 2

吉村　俊昭

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 2

吉村　俊昭

Name :
YOSHIMURA　Toshiaki

Title :
Status Survey of Omi's Emas: Part Two

Summary :
In this, the last year of the status survey of Omi's Emas, I will conclude my report on the results of the survey. While the original target was a survey of the Emas in all regions of Shiga Prefecture, as the survey progressed it became clear that it would not be possible to report on all of them on the same scale. Here, rather than simply presenting a list of facts from the Shiga Prefecture status survey, I will shed light on some special regional characteristics and present lesser-known details of the findings of the Ema survey.

一、はじめに

絵馬の現況調査は、当初設定した三年の調査期間も後半に入り、二〇一五年度で区切りを迎えることになるのだが、滋賀県全域調査が達成できずにまだ未調査地域が残る状況である。また、調査途中に日吉大社蔵長沢芦雪筆「猿図」絵馬と出会い、詳細調査に加えて復元作業を委託されるに至った。芦雪研究の資料として学術的に貴重なものであるが、署名落款と願主名を残すだけで、おぼろげに猿であろう形が見えるだけの絵馬である。一枚の絵馬を徹底して調査できることは貴重な経験であるが、同時に現況調査の時間を削ることになった。長沢芦雪筆「猿図」絵馬は、研究と合わせて学生を中心に復元作業を進め、奉納当初の姿を復元できた。これについては『文化誌「近江学」第８号』（二〇一六年一月発行）に復元模写の詳細を挙げているので本文では割愛する。

二〇一四年前半までの調査報告は『成安造形大学附属近江学研究所紀要第４号』（二〇一五年三月発行）で取り上げているので、今回はその後の調査報告となる。これまでに引き続き大

津市仰木以北、高島市、長浜市高月以北の調査を一年三ヶ月かけて行った。ちょうど琵琶湖西岸から湖北に至る琵琶湖を半周する調査区域となった。報告には間に合わないが草津市、近江八幡市、彦根市なども年度内の調査予定に組み込んでいる。大津市の石山寺、比叡山延暦寺、また長浜市の竹生島には貴重な絵馬が存在することがわかっているが、次年度の追加調査に含めることで慎重に取り組みたい。

二、絵馬の地域的特徴

先に述べたように非常に広範囲になっていて、地域文化の違いから特徴を一括して述べるのは困難である。行政区画とはやや異なるが、文化的相違面から「堅田・旧志賀町」「高島・新旭・安曇川・今津・マキノ」「朽木」「西浅井・余呉・木之本・高月」に大別して概要を述べる。

堅田・旧志賀町

大津市堅田は交通の要衝であり比較的大きな神社があるにもかかわらず絵馬の存在が少ない地域である。大津市真野の神田神社の絵馬堂は焼失。大津市伊香立途中町の還来神社（もどろき）の絵馬は確認できていない。旧志賀町地域も未確認である。絵馬の存在が確認できるのは唯一、若狭街道沿いの葛川坊村息障明王院である。地域的特徴は明らかにしにくく調査結果は明王院の項で改めて詳細を述べる。

高島市　新旭・安曇川・今津・マキノ

堅田・旧志賀町に続く北国海道沿いの地域である。白髭神社など全国でも知られる神社があり、社寺を中心に地域に根付いた祭事が多くみられるにもかかわらず、この地域も絵馬はあまりない。ただ、マキノ町海津天神社には狩野山楽筆「繋馬図」、「三十六歌仙図」、新旭町大田神社には原在中筆「曳馬図」などがあり、京都の錚々たる画家の絵馬が存在する。これらの絵馬は地域の信仰よりも、それぞれの社寺が徳川家や京都の社寺の直轄であったなど、中央権力との繋がりがあったことにより、絵馬が奉納されたといえるだろう。

高島市　朽木

現在は山中の奥深い地域に見えるが、過去には京都、若狭を結ぶ若狭街道沿いの街道筋として繁栄した。地理的には京都、大津からは程遠いにもかかわらず多くの絵馬が存在する。京都の木材の供給地であり、長らく朽木氏の支配下で歴史的にも独自性を保ってきた。そのため独特の「しこぶち信仰」などがあり、信仰については古式のしきたりを保っている。絵馬奉納は比較的近年まで習慣として残っていて平成に奉献された絵馬も見ることができる。氏子による様々な祈願や成就に関わる多様な絵馬があり、天変地異を含め時節折々の奉納は、氏神信仰と

絵馬奉納の関係をよく伝えている。

長浜市　西浅井・余呉・木之本・高月

西浅井町には菅浦の須賀神社など、鎮守社として特徴のある神社があるが、余呉町も含めて絵馬は確認できない。北国海道沿いの湖西堅田以北、湖北の西浅井・余呉地域は絵馬がほとんど確認できない。発句等の懸額も少なく絵馬奉納の習慣がなかったか、早くになくなったかであろう。

木之本・高月地域は神仏習合が色濃く残り、観音信仰と合わせて寺院に絵馬が多く残されている。北国街道沿いであり遠方からの参詣があったことから、中央の絵師によるものではないが大絵馬もあり、寺院または京都の寺院のように宿坊に絵馬が奉納されていたようである。現在も檀家、氏子により大切にされ、長浜城歴史博物館などで精緻な調査が行われ、画題や作者について明らかになっている。

三、調査社寺と絵馬の概要

ここでは、紀要第4号にあげた調査に続けて行った二〇一四年九月以降の調査社寺の概要および、絵馬数が多い、あるいは特筆すべき絵馬が存在するところについてさらに詳細を述べる。事前の社殿状況調査や電話による確認調査で絵馬が存在しないと思われる神社については詳細調査の対象から外している。また、調査したものの絵馬が無い、もしくは近年の懸額のみ現存する場合、あるいは写真、刺繍のように今回の絵画的要素に限定した調査としては対処しにくいものについては社寺名のみ取り上げまとめた。

大津市葛川坊村　息障明王院（そくしょうみょうおういん）

調査は参籠行事もいれて合計三回となった。最終二〇一四年十一月三〇日に延暦寺および明王院の許可を得て詳細調査と写真撮影を行った。明王院は安曇川沿いの若狭街道に面した天台修験の寺院である。貞観元年（八五九）開山と伝えられる。回峰行と葛川参籠で知られ、七月には「太鼓廻し」行事が行われる。文化財も多い。絵馬は本堂外陣に懸けられていて、状態の良いものが十三点存在する。

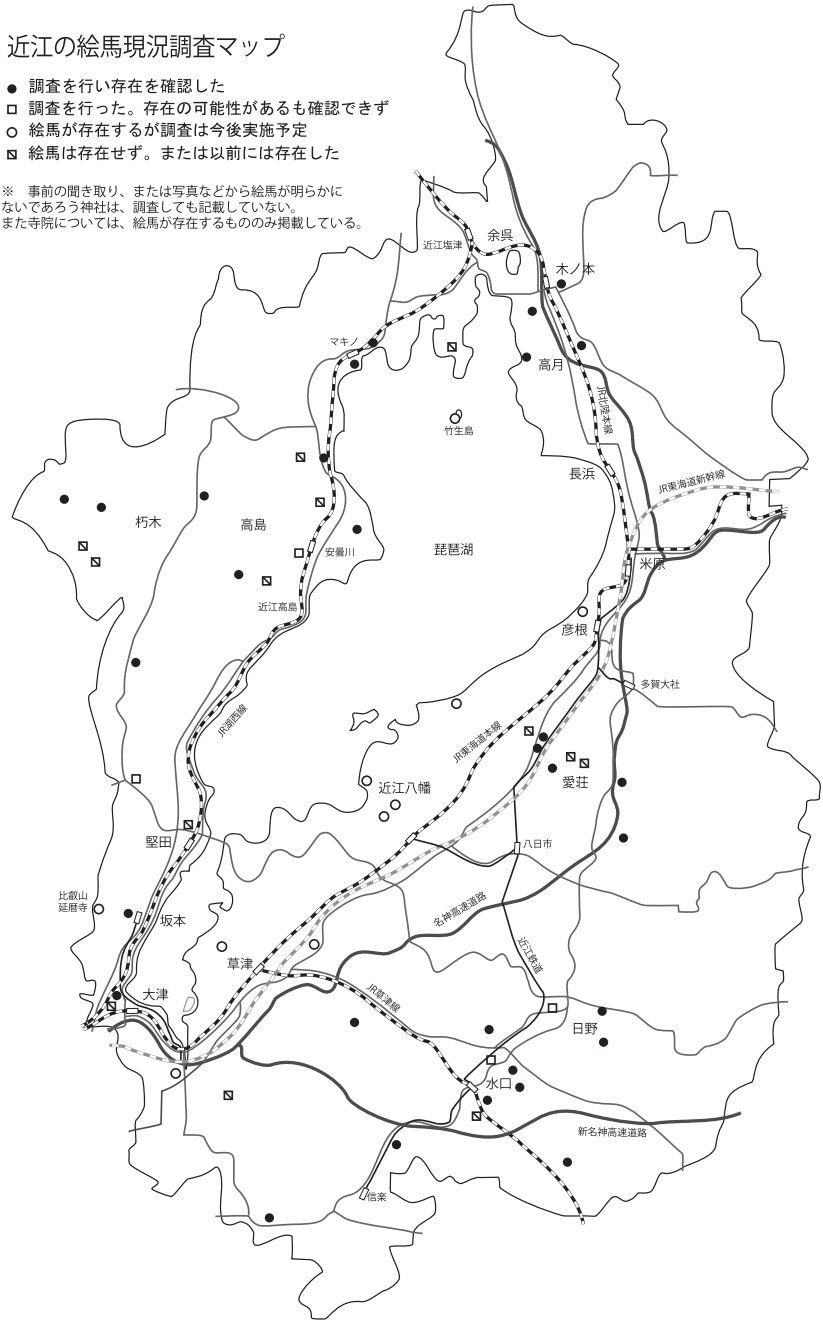
「宇治川先陣争い図」（写真3）横二二五cmの大絵馬で延享三年（一七四六）の奉納年、願主の中村某が読み取れる。剥落が進んでいるため絵師名については確認できない。顔、目の表情や馬の表現に江戸中期の絵画的特徴が見られる。梶原景季、佐々木高綱と周りの兵が多数描かれ躍動感にあふれる絵馬である。

「朝比奈と鬼の首引き図」（写真4）絵馬でよく取り上げられる題材。横一m弱。保存状態がよく汚れが少なく細部まで奉納当時の様子が確認できる。万治二年（一六五九）京願主八人とある。「源氏物語図（明石）」（写真5）横一五一cm。額には飾り金具がつき贅沢な絵馬であったと考えられるが、状態は良く

近江の絵馬現況調査マップ

- ● 調査を行い存在を確認した
- □ 調査を行った。存在の可能性があるも確認できず
- ○ 絵馬が存在するが調査は今後実施予定
- ▨ 絵馬は存在せず。または以前には存在した

※　事前の聞き取り、または写真などから絵馬が明らかにないであろう神社は、調査しても記載していない。
また寺院については、絵馬が存在するもののみ掲載している。



ない。文字は判読できない。画風、絵の具の状態から宇治川先陣争いとさほど変わらない江戸中期の奉納であろうか。

「神功皇后図」（写真6）横一四六cm。願主近江屋某が判読できるものの他の文字は確認できない。同様に江戸中期であろうか。

他に安政二年（一八五五）奉納の「武者絵」、奉納年不明一対の「弁慶・牛若丸図」、寛政三年（一七九一）奉納「馬図」、「那須与一図」「旭に松図」、朽木地域でも度々名が出てくる絵師白鴎池田光筆の明治二五年奉納「西王母図」などがある。

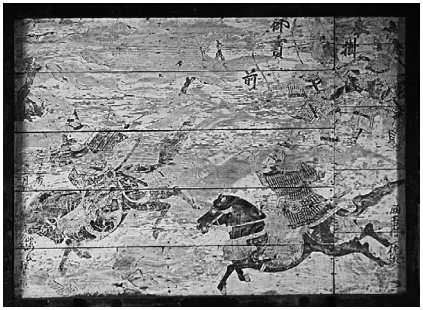


写真3：宇治川先陣争い図／延享三年

写真4：朝比奈と鬼の首引き図／万治二年

写真5：源氏物語図（明石）／年代不明

写真1：明王院

写真6：神功皇后図／年代不明

写真2：記録写真撮影風景

高島市朽木中牧　大宮神社

予備調査を入れて二回の調査を行う。山間地ながら広い境内を持つ。本殿は覆屋があり摂社として八幡神社、遥拝所常神社（若狭常神）がある。宮司や宮管理、宮守など役により社務所入り口や座の位置が決まっているなど、信仰の伝統が継承されている。朽木清継宮司の立ち合いのもと覆屋の奥まで絵馬の調査を行い、傷み打ち捨てられた小絵馬なども改めて取り出し確認と撮影ができた。氏子の方々も絵馬についてはさほど関心事ではなかったため、思った以上に絵馬があることや剥落、破損など状態が悪いことに気付き、保存の必要性を感じたようである。

絵馬は総数二〇点。中型の大絵馬が本殿に六点、社務所に三点の計九点が現存している。小絵馬は本殿、摂社で十一点確認できた。

江戸期としては、文化（一八〇四から一八一八）の元号のある武者絵「真田十勇士図（三好青海入道）」横七六cm、文久元年（一八六一）にあたる文久辛酉年の氏子中奉納「桜井の別れ図」横一二三cmがある。ともに剥落がひどく状態は良くない。社務所内には弘化四年未（一八四七）奉納の武者絵「巴御前図」（写真８）、天保十三壬年（一八四二）氏子中奉納の「厳島神社境内図」がある。ともに中型の絵馬で室内にあるため本殿の絵馬より状態はいい。

本殿に向かって右に生杉の山本氏奉納「神功皇后と武内宿禰図」横六八cm、左に明治三六年「尉と姥図」（写真９）横八八cmがある。神功皇后には七三翁白鷗池田光重の絵師名がある。尉と姥には絵師の名がないものの画風筆跡より同じく白鷗の絵

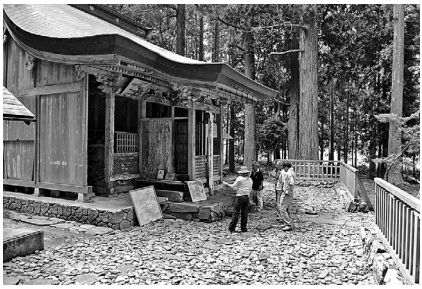


写真7：大宮神社本殿　氏子の方々に話を聞く

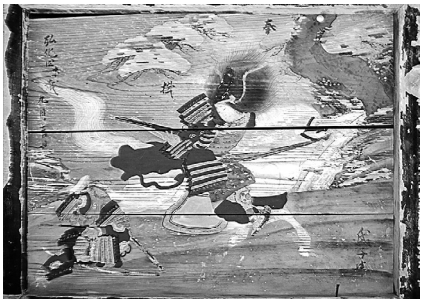


写真8：巴御前図／弘化四年

写真9：尉と姥図　白鷗池田光重／明治三十六年

である。二つの絵に挟まれて大正十年酉生杉西川某奉納「天岩戸図」（写真10）横五八cmがあり絵師西川陽鶴の名がある。明治から大正期の絵馬には白鷗池田光（光重）およびその弟子と思われる西川陽鶴とともに湖西、安曇川沿いに多く存在する。

小絵馬には歌舞伎絵、参詣図、馬図、武者絵、物語絵、吉祥図など様々あるが、珍しいのは雪遊びの図である。何の祈願かは定かでないが五人の子供が雪だるまを作っている絵でほほえましい。欧州では雪だるま信仰があるが本邦では確認できない。

写真10：天岩戸図　西川陽鶴／大正十年

写真11：子供雪遊び図

高島市朽木能家　山神神社（さんじんじんじゃ）

予備調査を入れて三回の調査を行う。由緒等不明だが明治初期村社に列せられている。本殿および覆屋は比較的新しい。絵馬は拝殿と寄り合い所を兼ねた建物内にあるのだが、この建物が建築として貴重である。トタン屋根で覆われているが内部は茅葺で、寄り合いの間は囲炉裏がきられている。能家集落は限界集落になっており、別途聞き取りも含めて精細な調査が必要である。

絵馬数四四点。絵馬は小絵馬が大半である。やや大ぶりのものもあるが画題から小絵馬にあたると思われる。屋内とはいえ雪深いところでもあり保存状態は良いとはいえない。以前はもっとあったが盗難にあったということである。絵馬を収納し公開しないところも増えているが、奉納懸額の意味からすればいかがなものかとも思え、難しいところである。絵馬の状態をこれ以上劣化させないことと、開放された状態での盗難防止に対処する必要があるだろう。

拝殿内の四面に計三二点の絵馬が掛けられている。江戸末期寛政、享和、文政の絵馬が九点存在するが破損、剥落で形をとどめないものも多い。画風は朽木、葛川の小絵馬に共通したものが見受けられる。山間部だが江戸後期には盛んに絵馬奉納がなされていたことがわかる。残りは明治から大正にかけての絵馬が多く氏子奉納で画題も曳馬が多い。古老に聞くと、大正時期は馬橇で木材の搬出などを行っていたとのことで、生活につ

ながる画題であったかもしれない。大正期の絵馬は大半が西川陽鶴の筆によるものである。同じ下絵を繰り返し用いたり、表裏反転して用いているなど長年にわたり描き続けた陽鶴は高島、朽木の絵馬師であっただろうと推測する。

写真12：拝殿内の様子

写真14：曳馬図／享和年

写真13：尉と姥図／文政十一年

写真15：曳馬図　西川陽鶴／大正九年

写真16：曳馬図　西川陽鶴／大正十三年　大正九年と比較して馬、手前の舎人が同じ左右対称である

高島市朽木野尻　山神社（山神神社）

天正年間に社殿再建の記録があり十六世紀後半には存在したことがうかがわれる。朽木でも街道沿いの神社である。やや小さめの拝殿があり左右に絵馬が掛けられている。非常に丁寧に懸けられていて、剥落風化した絵馬も今のところそれ以上に進まず現状維持ができている。絵馬は十一点、他では見かけない画題の絵馬が数点ある。明治二六癸未年奉納「新田四朗忠常猪退治図」横七〇㎝、白鷗の筆によるものである。大正三年「桃持ち猿図」（写真18）悪事去図の文字がある。よほどの災いがあったのか鋭い目つきの猿が描かれている。大正二年関根、越智両氏による奉納「平経正図」（写真19）は謡曲竹生島に画題を得

ていると思われる。

社務所内入り口すぐの壁面に横一八二cm、縦一五一cmの家型大絵馬が懸けられている。社務所改築の折に懸け直したということである。「源頼政鵺（ぬえ）退治図」（写真20・22・23）である。大胆な構図と人物の動き、具足や衣の描き方に地方絵師にはない力量があり、鵺は剥落がひどいが頼政と猪早太はしっかり残っている。安政三丙辰年（一八五六）願主社中、右側下部に「摂陽山人　公泰謹画之」の墨書と花押がある。絵師の名はない。

鵺退治の絵の多くはなぜか頼政が左に描かれていることが多いが、この絵馬は右にいる。その特徴で記憶を頼りに調べなおすと、京都府八幡市の松花堂美術館蔵、応挙の弟子駒井源琦による「鵺退治図屏風」（写真21）に瓜二つであった。源琦は寛政九年（一七九七）に亡くなっているから絵馬の奉納年と合わないので彼の作品ではない。摂陽山人以下の文字であるが、摂陽山人は江戸末期の文筆家として名が上がるが絵師としての記録はない。絵馬に書かれた摂陽山人が同一人物であれば、「公（民と解釈）やすらかに謹んでこれを画かしむ」と読むことで、摂陽山人が世の安泰を願い絵馬を描かせたと解釈できる。奉納の前々年、安政元年に南海大地震、翌二年には江戸大地震が起こっている。この絵馬が山神社にある理由は分からないが、天変地異が立て続くことに、怪事の元凶が鵺という話とからめて、描かれてから半世紀ほどしかたっていなく広くその存在が知られていたであろう源琦の鵺退治屏風の絵を写し、安泰祈願奉納されたものではないかと解釈する。

写真17：山神社　拝殿とその後ろに本殿

写真18：桃持ち猿図／大正三年

写真19：平経正図／大正二年

写真21：駒井源琦筆　鵺退治図屏風／寛政九年

写真20：源頼政鵺退治図／安政三年

写真23：源頼政鵺退治図（一部）摂陽山人

写真22：源頼政鵺退治図（一部）源頼政

高島市新旭町太田　大田神社

農村部の集落の中にある神社である。由緒では延暦年間に創立となっていて、古くより山科の曼殊院との繋がりがあったようである。寛政十二年曼殊院門跡直轄となったため特に京都の関係が強まったかと思える。拝殿横の小さな絵馬殿にガラスケースに入った原在中筆文政十年丁亥（一八二七）杉浦氏奉納「曳馬図」（写真24）がある。舎人の表現に様式性を感じるが、馬の表現や唐鞍の飾りも細部にまで描きこまれた優れた絵馬である。奈良の春日大社に向きが裏返しだが唐鞍や飾りもよく似た表現の天文二二年（一五五三）奉納「曳馬図」がある。参考にしたとは言えないものの、絵師としてどこかの時点で目に留めたことがあったかもしれない。他に文政十一年戊子（一八二八）洞上祖關画金釜出土の「二十四孝郭巨図（かくきょず）」（写真25）、文政十年「天神牛図」、明治三五年「立花図」がある。

（注　調査許可の関係から絵馬の採寸ができていない）

長浜市木之本町木之本　浄信寺

緩やかな石畳を上り詰めたところにある木之本地蔵尊で知られる名刹である。天武天皇四年建立の寺伝を持つ。たびたびの堂宇消失の後、宝暦年間（一七五一～一七六四）に再建された。

本堂（地蔵堂）外陣壁面上部に押絵、彫り物も含み十数点の絵馬が掛けられている。おおむね保存状態は悪くないが、寺院の絵馬の多くがそうであるように一部に煤と脂汚れがある。外陣左に天保十己亥年（一八三九）月湖山人筆河尻光貞奉納武者絵「巴御前図」（写真27）横一五一cmがある。扁額軌範に祇園社の武者絵「八幡四郎」（写真28）が載っているが、巴御前の頭部を差し替えただけでほとんど同じである。また、馬の脚は

写真24：原在中筆　曳馬図／文政十年

写真25：二十四孝郭巨図／文政十年

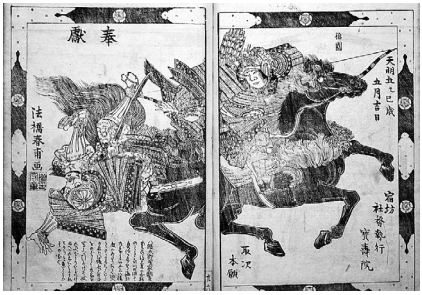


写真28：扁額軌範の八幡四郎義家図

写真26：木之本浄信正面

写真29：渡辺綱一条戻り橋図／天明六年

写真27：巴御前図／天保十年

前後とも伸び切り躍動感はなくなっている。一番大きな絵馬は、天明六丙午年（一七八六）月岡雪鼎門人橘惟成筆「渡辺綱一条戻り橋図」（写真29）一八五cmで近郷の七人による宿坊春渓庵への奉納であるが、金箔をふんだんに使い額縁も贅沢な設えとなっている。他に天保年間「参詣婦女図」、文化三丙寅年（一八〇六）「七福神図」、明治三一年（一八九八）雲峰筆「吉祥動物図（鳩・八幡神）」、武者絵「楠正成桜井の別れ図」、「武者絵」、「旭図」などがある。

長浜市高月町唐川　赤後寺（しゃくごじ）

湧出山（ゆるぎさん）山麓の日吉神社境内の唐喜山赤後寺の観音堂に絵馬がある。

平安時代の作である重要文化財千手観音と聖観音立像が本尊である。手狭な堂内に十五点の絵馬が懸けられている。その多くは江戸期のもので、最も古いのが寛文元年（一六六一）京都五兵衛、久三郎奉納「渡辺綱羅城門鬼退治図」（写真31）横七〇cm。非常に傷みがあるが絵の全容がわかる程度に残っている。構図は鬼が柱に絡みつき綱の兜を掴んでいる典型である。寛文十二年（一六七二）「曳馬図」（写真32）一二四cm。金箔を全体に貼った絵馬だが中央より下部分の絵具の痛みが激しいが、舎人の表情はよく残り豊かである。天和三年（一六八三）雪舟末□長谷川等真筆摂刕大阪住大橋清助久利奉納「黄石公張良図」一八二cm。傷みが激しく下書きの線のみ残っているのが大半。ただ、黄石公と張良の顔部分は比較的残る。寛政六寅年（一七九四）浅井郡八若氏奉納「宇治川の先陣争い図」（写真33）横九二cm。中型の絵馬であるが武者の描写や構図に優れる。奉納年不明速水村柴田氏奉納「武者図（寺目録による）」横八一cm。武者図となっているが、画題は「弓弭（ゆはず）の泉」（写真34）ではないだろうか。源頼義が弓の端、弓弭で岩を突いたら水が湧き出したという説話に基づくもので、その場所は東北の岩手町にある。関西では珍しい画題である。その他繋馬や役者絵など特徴的な絵馬が揃っている。

（注　絵馬の寸法は赤後寺提供の資料に基づきセンチに四捨五入して記載している）

写真30：日吉神社境内の赤後寺

写真33：宇治川先陣争い図／寛政六年

写真31：渡辺綱羅城門鬼退治図／寛文元年

写真34：弓弭の泉図／年代不明

写真32：曳馬図／寛文十二年

長浜市高月町高月　慈眼山大圓寺（高月観音堂）

国宝十一面観音のある向源寺（渡岸寺）の南側に位置する。延暦六年建立の寺伝がある。賤ヶ岳の合戦で焼失し翌天正十二年再建。観音霊場の札所として信仰を集める。

観音堂内三面に七点の絵馬が懸けられている。寛永十七年（一六四〇）紀伊國住人岩坪信直祈願成就奉納「繋馬図」（写真36）。背景に金箔を貼った黒馬が描かれている。装飾性や表現上の躍動感はないが落ち着いた繋馬の典型である。元文四己未年（一七三九）「近江八景図」は他府県ではよくある画題だが県内で懸けられているのは珍しい。宝暦庚辰年（宝暦十年・一七六〇）京都住廣部才治秀政奉納「渡辺綱羅城門図（大圓寺説明書）」だが説明の画題間違いであろう。「焚噲門破り図（はんかいもんやぶりず）」（写真37）が正しい。中国式の門、武人焚噲が盾を抱えて門を開こうとしている。朝比奈の門破りなどと中国故事が合体して作られた話で、それらを基にした和田合戦女舞鶴がすでに上演され、当時ではよく知られた説話であった。人物表現様式から江戸初期の絵馬であろうと推察する制作奉納年不明「大名行列図」（写真38・39）であるが、絵の周囲の文様が気がかりである。湖東の百済寺「石曳図」（写真40）に同じ模様が絵を取り囲むように描かれている。絵を取り囲むように装飾された文様は特殊である。石曳引図については奉納年代や由来が明確でない。すでに考察されているかもしれないが、この大名行列図と関わりがあるのであれば、両絵馬の制作

年代や由来など解き明かす糸口になると思える。

他に、元文元年丙辰「虎渓三笑図」、文政七年（一八二八）「黄石公張良図」、元治元年（一八六四）「参詣図」がある。

（注　調査環境の関係から絵馬の採寸ができていない）

写真35：大圓寺観音堂内　鴨居の上に絵馬が懸けられている

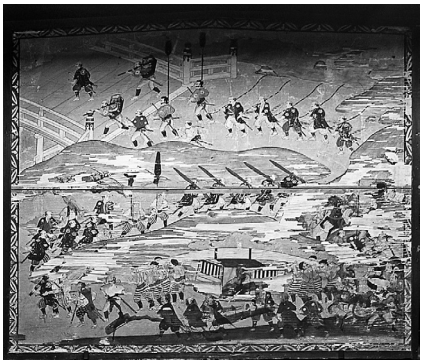


写真38：大名行列図／年代不明

写真36：繋馬図／寛永十一年

写真39：大名行列図縁取り文様（左上部）

写真40：同じ文様が見られる百済寺石曳図（一部）

写真37：焚噌門破り図／宝暦十年

長浜市片山　片山神社

琵琶湖に面した漁村の高台にある。「馬図」「天岩戸図」「宇治川の先陣争い」「楠正成桜井の別れ図」（写真41）「松鷹図」があるが奉納年願主名など読み取れなかった。また船絵馬は懸額されていない。

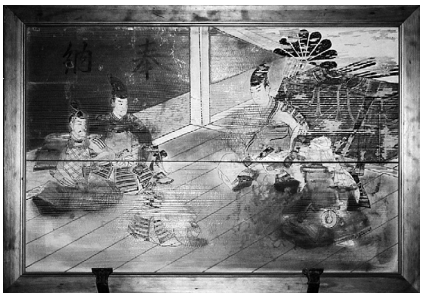


写真41：楠正成桜井の別れ図／年代不明

その他の調査社寺

大津市真野	神田神社	宮司に確認、火災で焼失
大津市伊香立	還来神社	宮司に確認、情報があるも存在不明
高島市朽木桑原	蛭子神社	絵馬なし
高島市高島	玉津神社	昭和五十二年奉納吉祥図（朝日に鶴）
高島市新旭日町	大國神社	現代の干支絵馬
高島市新旭日町	健速神社	曳馬1点
高島市新旭日町	波爾布神社	絵馬なし
高島市高島町	水尾神社	絵馬なし
高島市安曇川町	箕島神社	馬図があるも収蔵されているため調査できず
高島市マキノ町	唐崎神社（川裾宮）	家型絵馬1点
高島市マキノ町	海津天神社	山楽の絵馬等すべて非公開で調査できず
長浜市西浅井町	須賀神社	絵馬なし

四、おわりに

この報告は近江学研究所小嵜善通研究員、大原歩研究員との共同調査研究を小生がまとめたものである。調査にあたっては、高島市教育委員会文化財課参事の山本晃子氏、宮司朽木清継氏をはじめ各神社の宮守の方々など、多くの関係者に貴重な時間を割いて協力いただいた。お礼を申し上げる。調査することで地域にある絵馬について改めて認識していただき、少なくとも現状での保存が進めば有難く思う。しかし、山間部など氏最子が減少し維持管理の人手の少ない神社において、絵馬など民俗資料が年を追うごとに傷み無くなっていくのは残念なことである。この「近江の絵馬現況調査」の調査内容が、研究者だけでなく一般の方々が民俗資料に関心をもち、地域文化として継承されていく一助となれば幸いである。

物語解説

鵺（ぬえ）退治

平家物語第四巻に鵺（鵼）退治の話が出てくる。「東三條の森の方より、黒雲一村立來（つ）て、御殿の上に聳（い）たり。頼政吭と見上（げ）たれば、雲の中に恠（し）き物の姿あり。射損ずる程ならば、世に可レ有とも不レ覺。さりながら矢取（つ）て番ひ、南無八幡大菩薩と、心の中に祈念して、能引（い）てひやうど放つ。手答して、はたと中る。得たりやうと、矢叫をこそしてんげれ。猪の早太つと寄（り）、落（つ）る處を取（つ）て押へ、柄も拳も透れ〳〵と、續様に九刀ぞ刺（い）たりける。其（の）時上下手々に火を燃（し）て、是を御覧じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手は虎の如（く）にて、鳴（く）聲鵺にぞ似たりける。怖しなども愚なり。（「平家物語」校注梶原正明・おうふう　より）」

宇治川の先陣争い（うぢがわのせんじんあらそい）

平家物語第九巻宇治川の合戦場面にこの話が出てくる。長文なのでその一部を紹介する。「爰に平等院の艮、橘の小嶋が崎より、武者二騎引（つ）かけ引（つ）かけ出來たり。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木の四郎高綱也。人目には何とも見えざりけれども、内々先に心を懸（け）たるらん、梶原は佐々木に一段計ぞ進んだる。佐々木、如何に梶原殿、此（の）河は西國一の大河ぞや。腹帯の延（び）て見（え）さうぞ。縮（め）給へと云（ひ）ければ、梶原さも有（る）らんと思（ひ）けん、手綱を馬のゆがみに捨（て）、左右の鐙を踏透し、腹帯を解（い）てぞ縮（め）たりける。佐々木其（の）間にそこをつと馳抜（い）て、河へ颯とぞ打入（れ）たる。梶原、被レ謀ぬやと思（ひ）けん、驀て續（い）て打ち入（れ）たり。（「平家物語」校注梶原正明・おうふう　より）」

焚嘸門破り（はんかいもんやぶり）

古来より尋常でない剛力が活躍する話が語り継がれている。「焚嘸門破り」もその豪傑譚の一つで、それらは歌舞伎や浄瑠璃の題材となった。漢の時代、「劉邦の臣下であった樊噲は、鴻門の会にて項羽に見え、危機にあった主君劉邦を助けるために門扉を押し破って敵方の宴席に乱入する。それは『鴻門の会樊噲門破り』として特に武者絵の題材に好んで採られるようになった。（近世期の画像資料に見る門破り図像の受容と展開より）」

二十四孝　郭巨（かくきょ）

中国の孝行にまつわる故事。孝行に優れた二十四人の物語で元代の郭居敬が編纂。そのうちの一つ郭巨の話。

「貧乏之思供給　埋兒願母存　黄金天所賜　光彩照寒門

郭巨は河内といふ所の人なり。家貧しうして母を養へり。妻一の子を産みて三歳になれり。郭巨が老母、彼の孫をいつくしみ、我が食事を分け與へけり。或時、郭巨妻に語る様は、貧しければ母の食事さへ心に不足と思ひしに、其内を分けて孫に賜はれば乏しかるべし、是偏に我子の有りし故なり、所詮汝と夫婦たらば子二度有るべし、母は二度有るべからず、とかく此子を埋みて母を能く養いたく思ふなりと夫婦云ひければ、妻もさすがに悲しく思へども、夫の命に違はず、彼の三歳の兒を引きつれて、埋みに行き侍る。則ち郭巨涙を押へて、すこし堀りたれば、黄金の釜を掘り出だせり。其釜に不思議の文字すわれり。其文に曰く、天賜二孝子郭巨一不レ得レ奪ふことを民不レ得レ取ることを と云々。此心は天道より郭巨に給ふ程に、餘人取るべからずとなり。則ち其釜をえて喜び、兒をも埋まず、ともに歸り、母にいよく孝行をつくせるとなり。（「御伽草子　二十四孝」岩崎文庫貴重本叢刊　より）」

参考文献

・合田珉和・北川春成縮図「扁額軌範」全五巻　吉野屋大谷仁兵衛　文政二年
・渡辺黄鵠著・渡辺対岳縮図「厳島絵馬鑑」全五巻　天保三年刊　嘉永元年後印
・臨川書店「新修京都叢書」第八巻　扁額軌範・花洛絵馬評判　一九九四年第2刷
・木村至宏「図説近江古寺紀行」河出出版社　一九九五年
・司馬遼太郎・白洲正子・水上勉「近江路散歩」新潮社　一九八八年
・信多純一「祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―」思文閣出版　二〇〇九年
・須藤功「大絵馬ものがたり5　昔話と伝説の人びと」農山漁村文化協会　二〇一〇年
・大津市歴史博物館「庶民の祈り―近江の絵馬」一九九一年
・茨木県立歴史館「祈りの歴史と民俗　絵馬」一九九八年
・福岡県立美術館「神にささげた祈りの美　絵馬」一九九九年
・松葉涼子　立命館文学第６３０号　論文「近世期の画像資料に見る門破り図像の受容と展開」二〇一三年
・梶原正昭　校注「平家物語」おうふう（桜楓社）一九八四年
・岩崎文庫貴重本叢刊　近世編　第一巻「幸若舞曲　御伽草子」貴重本刊行会　一九七四年

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第５号

発行日　平成28年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　木村 至宏

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937